

福島原発、政府がひた隠す本当の話と放射能の今後

ルポライター・明石昇二郎

&ルポルター・ジュ研究所

『週刊プレイボーイ』2011年4月4日号)

被災した住民を放射能が襲う

大震災と原発の事故が同時に発生する破局的災害「原発震災」がついに現実の話となってしまった。

3月12日午後3時36分、東京電力福島第1原発1号機（福島県大熊町）で炉心溶融事故が起こり、原子炉建屋の上部が吹き飛ばす大爆発が発生。福島第1原発から半径20km圏内の住民に避難指示が出された。これまで、原発の防災対策は半径10km圏内の住民対策で十分とされてきたが、その想定を上回る非常事態が発生したわけである。

が、放射能で汚染される地域はその範囲にとどまらなかった。当時、主に北向きの風が吹いていたため、約5時間後の同日午後9時以降、福島原発の約120km北方にある東北電力女川原おながわ（宮城県女川町）のモニタリングポストで、福島原発から漏れ出た放射能が検出され始める。事故翌日の3月13日午後8時半には、環境値のおよそ300倍にあたる「9000ナノグレイ

／時」という途轍とてつもない放射線が検出された。

地震や津波で被災した住民を、今度は放射能が襲う。これが「原発震災」だった。

筆者は、ちょうど10年前の2001年3月、『サンデー毎日』誌上で4週にわたり、「シミュレーション・ノンフィクション原発震災」と題した連載記事を書いたことがある。これは東海大地震を起因として、中部電力浜岡原発

で事故が発生した場合、日本にどのような被害がもたらされるのかをシミュレートしたものだ。

不幸にして筆者のシミュレーション結果は、時々刻々と現実の話へと変わりつつある。それは同時に、事故シミュレーションが結果的に何の役にも立たなかったことをも意味していた。

放射能が東京に襲来した！

福島第1原発にある1〜4号機で次々と発生した事故の数はあまりにも多い。特筆すべきは、前述の1号機で起きた炉心溶融と大爆発、2号機で起きた炉心溶融による圧力容器破壊、3号機で起きた炉心溶融と原子炉建屋の大爆発、そして4号機で起きた使用済み核燃料プールの火災だ。この原稿を書いている3月15日現在、4つの原発がコントロール不能に陥り、高濃度の放射能が大気中に漏れ続けている。

その結果、原発所員は決死隊の30人程度を残して退避し、福島第1原発の半径20kmから30kmの間に暮らす住民は屋内退避を命じられた。自衛隊も加わった決死隊による原子炉への注水作業は今も続いている。

15日午前3時、それまで北や東に向かって吹いていた原発周辺の風が、南向きに変わる。原発から漏れ出た放射能は日本の首都・東京に向かい始めた。

筆者がこの事実気づいたのは同日午前5時過ぎのことだった。茨城県環境放射線監視センターによる同県内の環境放射線測定値が急激に上昇していたのだ。7時の時点では79ナノグレイ／時だった同県銚田ほした市縦山で、40分後の7時40分には5343ナノグレイ／時を計測。見えない放射能の「かたまり」が、微風に乗ってゆっくりと南下し続けていた。

筆者は大震災発生翌日の3月12日より、友人のジャーナリスト・佐久間

淳子氏らと協力し、普及型の放射線検知器「アールダン」(R-DAN)を使い、福島県内外の放射線データ観測活動に着手していた。簡易放射線検知器のため、電力会社や行政機関が行なうような「シーベルト」や「グレイ」といった値での計測はできず、どんな放射性核種が飛来しているのかもわからないが、普段よりも多い放射線が周辺に飛びかい始めたことを知らせてくれる能力はあった。

それに、もし地震で被災した原発が深刻な放射能漏れを起こしたとしても、電力会社や政府はその事実を隠蔽してしまう恐れもあった。現に1986年の旧ソ連・チェルノブイリ原発事故の際は、海外の国々で高濃度の放射能が検出されるまで、当時のソ連政府は事故発生を認めようとはしなかった。

「アールダン」観測網ばかりか行政機関の観測網までも異変の発生を感知していた。が、政府やマスコミは沈黙し続けている。緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム「スピーディ」も、活用されている気配はまったく見られない。筆者は情報の公表を決断し、同日午前8時、自身が主宰するルポルタージュ研究所(通称・ルポ研)のホームページに次のような「お知らせ」を掲載した。

*

●ルポ研からのお知らせ●
2011年3月15日

おはようございます。

ところで今、福島原発から漏れ出た放射能が東京方面に向かっています。午前7時の段階では栃木や茨城のあたりになって、微風に乗ってゆっくりと南下中です。市民レベルの放射線データ観測活動でもその事実は確認されておりです。

この情報をルポ研のサイトにアップすべきか、悩みましたが、政府やマスコミはこの情報を隠蔽し続けており、公表を決断致しました。

取り急ぎ、お知らせまで。皆様、本日は特に雨に濡れないようお気をつけ下さい。

*

このタイミングで公表しなければ、市民が放射能の襲来を知るのは被曝してしまった後のことになる。しかも、原発から漏れ出ているのは何の管理もされず、どんな放射性核種が混じっているのかもわからない放射能だった。公表するなら、躊躇している余裕はなかった。掲載直後からホームページへのアクセス数はうなぎ登りで増え続けていく。

ルポ研ホームページでの公表から約1時間半後の午前9時半過ぎ、NHKがようやく「放射能南下」の事実を報道する。

茨城県東海村にある東京大学の施設で午前7時46分に「5マイクロシーベルト/時」を観測、それが10分間継続して通報基準値を超えたため、原子力災害特別措置法に基づく通報を国に行なった——ことを伝えるものだ。この付近における通常の放射線量は「0.05マイクロシーベルト/時」だった。つまり、通常の100倍だ。だが、その頃にはすでに放射能は東京や神奈川まで到達していた。

「原発震災」は始まったばかり

NHKの第一報後、報道機関は揃って「放射能襲来」を報じた。東京では、炉心溶解の証拠とも言えるセシウムや放射性ヨウ素まで検出されたという。新宿では通常の100倍にのぼる放射線量が観測される。ただ、その手の報道には「ごく微量で、直ちに健康に影響を及ぼすレベルではない」といった注釈が必ず添えられていた。

それが事実とすれば、幸運だったとしか言いようがない。問題は、福島原発からどんな放射能がやってくるのか、誰にもわからなかったことだ。特に福

島第1原発3号機で使っていた核燃料は、ウランとプルトニウムを混ぜ炊きする「プルサーマル」燃料である。3号機はもともウラン燃料を燃やすよう設計されていた原子炉で、実験的に混ぜ抱き燃料を使い始めた矢先に事故に見舞われた。従って、南下してきた放射能に毒性の強いプルトニウムが混じっていたとしても何の不思議もない。「ごく微量で、直ちに健康に影響を及ぼすレベルではない」

ことは、この日の汚染レベルがたまたまその程度で済んだということに過ぎず、それがいつまでも続く保証は今のところどこにもない。

被曝した後に「ごく微量」であることを強調するより、ありのままを情報公開してもらったほうが、市民はよほど安心できるし、無用の被曝を自発的に防ぐことができる。

一方、福島原発周辺に暮らしてきた住民たちには、そんな「気休め」の言葉は何も用意されていない。

福島第1原発と同第2原発の半径10km圏内に暮らす関友幸さん(65歳)は、社民党の富岡町議会議員。大地震発生時は、福島第1原発が建つ大熊町にいた。避難勧告が出た後、福島県を脱出し、娘の暮らす埼玉県に避難していた。

避難の際、放射能に関する情報や被曝を防ぐための情報は何も提供されなかったという。町から言われたのは、「とりあえず避難しろ」

ということだけだった。関さんは語る。「安全だという公式見解が出ないと、富岡町の家には帰れないと思うんです。でも、それがいつの日になるのか。夢だったらしい……。夢であってくれればいいと思いますよね、やっぱり。こんなにことにならないと、原発が危険だっということはわかってもらえないんでしょね」

原発事故が収束に向かわない限り、

彼らは自宅に帰るメドすら立たない。3月15日の午後1時半。原発直近住民たちの避難場所のひとつ、福島県田村郡三春町にある「アールダン」数値が上昇し始めていた。同町は福島第一原発の真西約50kmに位置している。それまでは概ね1分間に20から30程度のカウント数だったものが、原発周辺の風向きが海から陸へと吹く東風に変わってから約1時間後、100を超えはじめた。午後2時にはその数値が700から800へと跳ね上がり、まもなく1000を超える。「アールダン」は「何か」が三春町に到来していることを告げていた。

「原発震災」はまだ始まったばかりだ。何も終わってはいない。

原発事故に詳しい京都大学原子炉実験所の小出裕章助教は、原発事故から身を守る方策として、重要度の高い順に次のようなものを挙げている。今後の参考にしてほしい。

- 1、原子力発電所を廃絶する。
- 2、廃絶させられなければ、情報を公開させる。
- 3、公開させられなければ、自ら情報を得るルートを作る。
- 4、事故が起きたことを知ったら、風向きを見て直角方向に逃げる。そして可能なら原子力発電所から離れる。
- 5、放射能を身体に付着させたり、吸い込んだりしない。
- 6、すべて手遅れの場合には、一緒にいたい人とともに過ごす。

現時点でこの「方策」が当てはまる人々は、福島第1原発の半径20km圏内に暮らしていた住民たちくらいかもしれない。実際、全員が地域からすでに脱出しているので、「すべて手遅れ」だったわけではない。

が、着の身着のまま家を飛び出してきた人たちが愛する我が家に戻れる日は、もしかすると来ないかもしれない

い。家には愛着のある品々が山ほど残されたままだろう。でも、それは取りに帰れない。

そんな地域が今後も増え続けるかどうかは、事故がいつ収束するかどうかにすべてかかっている。

配信元…ルポルタージュ研究所

Copyright (C) 明石昇一郎

URL : <http://www.rupoken.jp/>